

学ぶ喜び、学ぶ責務を実感した聴講生生活

田 辺 瑛 美

1. 聴講の動機

2016年4月、夫の転勤により、福岡県から宮城県へ転居してきた。こちらへ来て、被災した沿岸部や小学校を訪れ、東日本大震災の凄まじさを目の当たりにし、2016年4月14日、私にとって馴染み深い熊本県で地震が起き、災害に対する認識が大きく変わった。これまで私が住んでいた地域では、大きな災害に見舞われることが少なく、私自身の防災・減災意識が低かったのである。しかし、宮城県への転勤と熊本地震の発生により、「災害時に生き延びる、家族を守る、人の役に立つ」ためにはどうしたらいいのか考えるようになり、被災地の教訓を得るべく、東北福祉大学の『災害情報論』の講義にたどり着いたのである。

また、私はこれまで福岡県内の医療機関や生活保護行政で社会福祉士として働いていた。社会福祉士としての経験を積むにつれ、経験則でのアセスメントを行うことがあり、果たして適切なアセスメントが出来ているのか、と不安・疑問を感じることもあった。離職し、時間がある今だからこそ、これまでの経験のフィードバックやスキルアップをする機会であると考え、上述の科目に加え、専門科目の聴講を希望した。

2. 聴講を通して

『災害情報論』では、自然災害に関する情報の基礎知識や情報伝達手段について学び、恥ずかしながら、今頃やっと注意警報や警報等の意味を理解することができた。家庭では家族と災害について話すことが増え、防災セットの準備や現住居の避難場所の確認等を行った。また、講義では過去の災害や東日本大震災の研究結果や教訓に触れ、深く考えさせられると共に、災害時要援護者に対する行政の取り組みや災害ソーシャルワーク、災害派遣福祉チーム（DCAT）にも関心を持つこととなった。先生の話に「天災は忘れた頃にやってくる」とあったが、私がこの一年間で高まった防災・減災意識が一時的なものとならないように、（災害が発生しないことが一番だが）災害時に後悔しないように、防災・減災が特別なことではなく、日常の一部になるように努め、家庭内でも防災教育に取り組みたい。

専門科目については、先生の講義の展開がとても丁寧で分かりやすく、初心を思い出しながら聴講した。アセスメント（講義では「見立て」）やインフォームドコンセント、守秘義務等、実践で重要なことについて学び、特に心理的な見立ての話では、過去に関わったクライアントの言動が理解でき、私のアセスメントの弱点を自覚すると共に、根拠に基づいたアセスメントの重要性を再認識した。また、十数歳年が離れた学生とのロールプレイやディスカッションはとても新鮮で面白く、枠に捉われない発想や視点から教わることも多かった。更に講義に関係なく、個人的関心や疑問を持っている分野についても、先生が個別に助言や資料提供をして下さり、本当に有意義な聴講生生活を過ごすことができた。

（内藤裕子先生、昼食の時間まで対応して下さい、本当にありがとうございました。）

3. 終わりに

「勉強は楽しい、勉強できる時間・環境があるのはありがたい」と心底実感した聴講であった。知らない土地で子育てに追われる私にとって、週一回の講義や自宅で取り組む課題は本当に良い刺激であり、専門職としての自分を見つめることができた。過去に大学で福祉を学んだが、学生の頃と現場経験を積んだ今では、講義の受け取り方、面白さが全く異なり、専門職として実践している今だからこそ、謙虚に学ぶ姿勢を持ち続けなければならないと自覚した半年間であった。我が母校では、今のところ社会人聴講生の受け入れはないため、このような取り組みが広がってほしいと切に願う。

また、今年一年間は様々なところで東日本大震災を風化させないための取り組みを見聞きした。来年度からは福岡に戻ることになるが、この地で学んだことを忘れることなく、周囲にも伝えていきたいと思う。

最後になりますが、生涯学習支援室の皆様、大学の関係者の方々には大変お世話になりました。特に生涯学習支援室の皆様には、社会人学生の受け入れ業務だけにとどまらず、私の関心事を傾聴し、資料提供やDCAT養成研修の調整等していただき、心よりお礼申し上げます。